
東方現代人記～時を越えて～

先覚者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方現代人記〜時を越えて〜

【Nコード】

N0162Y

【作者名】

先覚者

【あらすじ】

かつて幻想郷という場所に幻想入りした青年が居た。

その青年は外の世界に住む自らの弟とは別に幻想郷で生きる事を決めた、だが幻想郷に突然予想もなかった悲劇が訪れる。青年は幻想郷の為に戦いそして悲劇を齎した存在に敗れ、死に逝く定めとなった。

しかし最後に彼は妖怪の賢者に希望を託し、彼の命の奇跡によって時は戻され、青年は存在しないことになった。

そして巻き戻された時新たな物語が幕を開ける。

ブログ1 柏木光希（前書き）

どうも、先覚者こと作者です、今回初投稿作品となります。

Q「こんな文章で大丈夫か？」

A「大丈夫じゃない、問題だ」

な感じの作品ですが最初は多めに見てください（汗
書いてく内にマシになるはず！（多分）

プロローグ1 柏木光希

どうして、こんなことに・・・

暗闇の中、そんな言葉が鮮明に浮かぶ。

俺の記憶が正しければこれは前に一人の少女が言った言葉だ・・・
いや、記憶が正しければなんて嘘だ・・・忘れるわけないし今も鮮明に覚えている、

あの時、予想もしなかった形で悲劇が訪れた時に彼女が言った言葉だ、整った顔立ちを

絶望の色に染め、目じりに涙を浮かべながら・・・

あの時俺は本当にこの運命を恨んだ、あの吸血鬼に運命でもなんでも操ってもらえば良かったと思うほどに悔んだ、無愛想だった彼女、神社で一人暮らす彼女、でも良く知ってしまったえば彼女程喜怒哀楽が激しく、現金なのは居なかったんじゃないだろうか？そして思いを告げたあの日の夜に俺は彼女の全てを守ろうと自分に誓ったんだ。でも今となっては・・・手遅れだ彼女はもういないし、この世界が壊れるのも時間の問題だ。

だが何もしないでいるつもりは無い、だからあの時あいつと契約したんだ。

ならなにをする？

ならどうしたいんだ？

暗闇の中確かにあいつの声が聞こえた。

男の自信に満ちた低い声、これは聞き間違えない———の声だ。

「俺は・・・守りたい、どんなことがあってもこの世界を守りたい」

俺はそんな問いに答えた、心から思っていることを、そして今は亡き彼女が思っていたことを。

なら今すぐこのまどろみから目覚めて動けばいい

なんて解りきつたことを言ってきた。解っているでもそれが出来ないのだ、俺には力が足りないから・・・それにどう答えようか考えていると

力が無いのなら余がくれてやる

余と共に進め、そして成せ、——を・・・これしかもう

手は無い

俺は茫然としていた、それは今話しかけてきているこいつが——

——なんて言葉にした

驚きと・・・

「いいのか？そんなことしたらお前まで・・・」

面白いことを言うな・・・

余は選んだのだ、お前と共に進み共に果てることをこいつが、創造神が俺と進むと言ったから。

何を呆けているのだ、さあ・・・お前は どうしたい？

この期に及んで創造神は俺に選ばせようとする、どうせ俺がどうするかなんて

解っている癖に。こいつはホントに食えない奴だと思っでも・・・

「俺は選ぶ、創造神——と進む道を！」

ホントは・・・

「よく選んだ、余と共に進むただ一人の人間、かしわぎひつ希 柏木光希
成就の為・・・逝くぞ」

背中を押してくれて嬉しかった、死ぬ時に一人じゃなく誰かが居てくれることに感謝した。

そして徐々に暗闇に光が差ししてくる、目覚めるんだ・・・
そして俺の意識は途絶えた。

気持ちいい風に見渡せば自然の木々が目に入る、俺が居た場所はおかしい、いや・・・

ほんの数分前まではそんな場所だった。

だが今はそんな見る影は既に無く、あるのは大地を焼く煉獄の炎と鼻を突く焦げ臭い

臭い、だがこんなことを引き起こした張本人は既に見当たらない。

俺は奴を止めに行くため倒れていた体を起そうとして、激痛が走った。

「っ!？」

突然襲った激痛に声にならない声を上げ、恐る恐る体を確認する。

「・・・ハハハ」

俺は自分の体を確認して乾いた笑い声を漏らす、見れば俺の体は腹部に抉られた

様な傷が有りそこから零れ落ちる俺の鮮血が乾いた地面を湿らせていた。

それでも笑いが漏れたのは今から俺がやろうとすることを妨害してしまう

程の傷じゃなかったからに他ならない。

（光希・・・大丈夫だな?—————に支障は・・・）

「大丈夫、問題ないっ！」

頭に直接聞こえる創造神の声になるべく今の状態を悟られないように返事を

返す。あんまり余計な心配はかけられない。

だけど契約を結んだ創造神にはバレバレみたいで

（光希、余と変われそんな状態では無理だ、少し休め）

と少し強めに言われて、仕方がないから素直に従っておく。

するとまるで体から意識が離れるような変な感覚に包まれ周りが暗くなる。

だが意識が途絶えるのとは違う様で視界も聴覚も安定している。

（まあ、少しの間だけ創造神に任せよう。）

そうして俺は傷を癒す為に眼を閉ざした。

プロローグ1 柏木光希（後書き）

こんな酷い物を読んでくれてありがとうございます。

とにかく文章とかは暫くしたら編集してきちんとします（汗

あとプロローグは3話から5話と長めになると思います・・・すいません（汗

ブログ2 創造神（前書き）

ブログ2ですwww相変わらず駄文ですが・・・

あとブログは基本シリアス続きです、本編からは

そうでもないの息は詰まらないと思います。

それと今回は「知識と歴史の半獣」が好きな人は飛ばすのをお勧めします。

そうでなくても今回は結構重い話です、でも大丈夫！本編からry

プロローグ2 創造神

創造神 side

光希と意識の交換を行い彼が眠りに就いたのが確認できてからとりあえず妖怪の賢者を

探すことにし、おそらく居るであろう博麗神社跡地に向かって飛ぶことにした。

ただあまり高速で飛んで準備が出来る前に奴と出会っては打つ手が無いので

速度を抑えて飛んでいるが。

ただ飛んでいるだけでは退屈ゆえ少し久しぶりに幻想郷を見てみようと思つて上空から

見渡してみる。今幻想郷がどうなっているかなど知っているのに今更見渡す自分に

人が悪いな（人ではなく神だが）と思いながら見渡す。

やはり久しぶりに見る光景はかつてのように美しい物ではなく180度違う光景だった。

緑は枯れ、大地は炎が覆い、かつて人里なる物があった場所には倒壊した家屋の残骸や

暴拳に出る生き残った人間の男たち・・・女性はもはや人ではなく物として扱われ、もはや

人里は無法地帯と化していた。

そんな中に見知った顔があった様な気がしてつい飛行を停止して神としての力・・・千里眼

を使ってしまう。

千里眼を使つてより鮮明に見えるようになった人里、それを見た瞬

間余は見なければ良かった

と後悔せざるえなかった。もはや人里のそれは暴挙ではなかった、それは狂気に値するもの

だったのだ、蹂躪し、踏み倒し、いつ来るかわからぬ死に怯え、女を犯す男……
その中に……

「人里の守護者よ……」

かつて人の形をとり人里なる物を見物しに行った時に世話になった彼女がいた。

「汝の希望は余が受け継ぐ……」

あの時助けられた時の借りは……

「この希望……光希に託そうぞ……」

余の命で返すぞ……

そう言つて千里眼を解き、こんどは速度を気にせずに博麗神社跡地に向かった。

この悲劇を終わらせる覚悟を更に強くして。

創造神 side aut

少し前まで幻想郷には博麗神社という神社があった、そこには赤と

白の巫女服を着た

巫女が住んでいて彼女の妖怪も人も惹きつける性格でよく人ではなく妖怪が集まっていた場所

、さらにはそのせいで人が寄り付かなくなり人里では万年金欠の妖怪神社とか、

妖怪に乗っ取られた神社だとか言われていたりした。

そんないつもなら紅白衣装脇だしスタイルの巫女が縁側でお茶でも飲んでのんびり

過ごしていた場所も今は無く、神社も倒壊しかつての光景は見る影も無く、ゆういつ黒く焼け焦げた

鳥居でここに神社があったと分かるくらいだろう。

さらにただでさえ森にある場所だというのにもはや色々な物が燃え盛りそのせいで煙が空を覆い隠す

幻想郷では昼なのか夜なのか分からない状況故に一層不気味かつ淋しい場所に思える。

そんな場所に空から降り立つ一人の人影……

それは、茶色の着物を着こみ黒色の胸当てを着て、髪をまるで蛇の尾のように長く伸ばした

青年、柏木光希こと創造神だった。

彼は地面に降り立って直ぐに周りを見渡し奴が居ないかを確認すると、かつて神社の

寶錢箱があつた辺りまで進む、すると暗くて気が付かなかったが紫色のドレスを着こんだ

金色の鮮やかな髪をした妖怪の賢者こと、八雲紫がいた。

「まだ博麗達が死んだあの戦いの傷から立ち治れないのか？妖怪の賢者よ」

「・・・光希なの？」

紫は突然背後からかけられた声に振り向き、そこに立つ青年が自分の知り合いだと気づくと
前に見た時と大分違う彼の姿を上から下までじつと見つめる。

「いえ・・・創造神様かしら？」

彼を観察した結果今の彼は自分がかつて話からかっていた彼で無いことに気付き、かつて

見た神に似たその身なりから創造神ではないかと予測する。

その問いに彼は

「左様だ、妖怪の賢者よ、だがな今はこの身なりの説明に裂く時間が惜しい、故に今から余が話す事を大 黙って聞いて欲しい」

肯定すると、時間が無いからまずは話を聞くよう促す。

それに紫に黙って一回頷くのを確認してから、創造神は話し始めた。

「余は・・・いや、余と光希は魔法を越えし奇跡・・・とき戻しの儀を行う！」

創造神の言葉が響く、そこに居るのは決意を固めた男とその突然の宣言茫然とした紫だけだった。

ブログ2 創造神（後書き）

駄文や（涙

文才どっか落ちてないかなあ・・・

小説難しい・・・

ブログ3 大魔法へとき戻し（前書き）

はいブログ3です。

少し長めですがその分グダグダかも（汗

とりあえずブログが終わりに近づいて良かった・・・
ま、今回も駄文ですおk？

編集しました。

プロローグ3 大魔法へ時戻し

side 紫

「余は・・いや、余と光希は魔法を越えた奇跡・・時戻しの儀を行う！」

目の前にいる男・・柏木光希いや、創造神はこう言った。そんな言葉聞いた

私はただ啞然としていた。それも無理はないだろう、今この男と神は「時戻し」と言っていた。

おそらくそれはその名の通り時間を巻き戻すと言う事なのだろう、それは創造神が言ったように

魔法を越えた奇跡・・ただそれが数分・数時間だけ時間を戻すだけならこんなに驚きはしない。だが

時間を戻す奇跡にも難易度ごとにレベルが存在する。それは・・

一つは分刻みで時間を戻す奇跡^{魔法}

二つは一時間刻みで時間を戻す奇跡^{中魔法}

三つは日にち刻みで時間を戻す奇跡^{大魔法}

このように分けられていて難易度が高いほど必要になる代償がでかくなる。

ここまでは良い・・だが問題は創造神が言った「魔法を越えた奇跡」と言ったこと。

さっき挙げた三つは引き起こす奇跡の大きさは違うが魔法と言う枠組みに収まっている、それでも

人間が大魔法等使おう物なら代償は命となるだろう。中魔法を越える奇跡は所詮人間には過ぎた物

だから人間は大魔法など普通使えない。だと言うのに創造神は大魔

法を越える奇跡を起こすと言った。

つまり数日時間を戻すなんて事で無く、数か月程戻すのだろう。創造神がそれを行ってどうなるかは分からない。ただ一つ確かな事がある。

それは大魔法ですら人は命を代償とするのにそれを越えたらどうなるのか……

それはきっと死よりも残酷な事だろう。

「……お言葉ですが創造神様は光希を殺すつもりですか？」

「……光希だけ……逝かせは……」

ひとつ間を置いてから帰って来たのは私の考察を肯定してしまうような力の無い言葉。

それで私には充分に理解できた、分かってしまった。

「貴方はお忘れなのかしら、今貴方は人間器に入っているのですよ？ それなのにそんな大がかりな儀式大魔法を行って光希器が耐えられると思いますか？」

「……」

とにかく私は創造神の主張の弱点をここぞとばかりに攻める、私が理解した事……それは

この儀式は大魔法その代償として光希の命だけでなく、恐らく創造神の存在を差し出すことによってその奇跡を起こせるということ。

そうでなければ全てが一致しないのだ、何故今更創造神が光希器と契

約し、一体化したのが

、それは恐らく創造神という生贄だけでは足りない程に時間を戻すから、そのために光希という器も生贄にしなければいけなかった。

という事に他ならない、だが彼は時間を戻してどうするのか・・・時間を戻しても運命の因果からは逃れることが出来ない・・・と前に吸血鬼が言っていた気がする。

「代償・・・ですか、貴方も光希も・・・」

「すまぬ、もうこれしか余が選べる道は無いのだ・・・お前をの残して先に逝く余達を許してほしい・・・だがこうしなくては愛するお前たちを守るには足りん」
想郷の民

「!?!?・・・愛するですか・・・」

その言葉を聞いて私は漸く分かった、この神の本質を・・・そうか、この神の本質は愛・・・

「うむ、余はこの世界もそこに住む者たちも全てが愛しい・・・ずっと見ていたから」
幻想郷

彼の言葉は最後の方には光希の言葉に変わっていく・・・ああ・・・今は神の器たる青年も・・・

「ずっと、霊夢と一緒に見てたから・・・みんなを、幻想郷を、紫さん程じゃないけど見て来たから」

私と同じように・・・

余は 愛しているぞ
「俺は愛してる！」

この幻想郷を愛していたのだ・・・

紫 side aut

光希 side

余は 愛しているぞ
「俺は愛してる！」

紫さんに俺は思いを伝える、俺と、創造神の幻想郷への愛を。

「ふふ・・・」

紫さんが突然扇子をスキマから取り出し口元に当て笑い出す、何か地雷を踏んだかと思って恐る恐る紫さんの表情を伺うと、目尻に光るものが見えた。

「紫さん・・・泣いているのですか？」

「・・・いいえ、違うわ」

そう言つと紫さんは目尻に涙を浮かべながらまるで愛しい人を見るような優しい笑顔を見せてくれた。

それは、前に見た霊夢の穏やかな笑みに似ていてなんだかこっちが

恥ずかしくなってくる。

「私や霊夢以外にもこの幻想郷をそんなに思っていてくれた人がいて嬉しかったのよ」

「？他にも永遠亭の皆さんや、紅魔館とこも他にも皆幻想郷は好きでしょうに」

「ええ、でもあつちのは皆素直じゃないから光希見たいに言ってくれるのは嬉しいわ」

そんな事を言われて確かにあのメンツは素直じゃないと思ってしまった。

紫さんはまだ笑顔をこちらに向けてくる、恥ずかしくて俺は少し目を背けてしまう。

そんなときに突然意識に直接話しかけてくる声が聞こえた。仕方がないから少し意識を集中すると

（目が覚めたなら先に余につたえんかつ！！）

（ちよっ！？悪かったって）

どうやら突然意識に割って入った俺に怒り心頭の創造神からのどぎつい声が頭に響く。

反射的につい耳を押えてしまった俺に紫さんは笑顔から一変し、いぶかしむ視線を向けるがどうやら俺が創造神と会話している事に気付いたようで、ごゆっくり・・・というかのように手を振ってくれた。

どうやら何処にも行かずに待っていてくれるようだった。

そんな紫さんに内心感謝しつつとりあえず創造神に謝罪の意思を伝

えることにする。

（悪かったよ創造神、会話の内容があれだったから言いだしずらくて・・・）

（まあもうそれはよい、どれ会話の途中だ意識を余に切り替える）

（えっ？でもあのことは俺から言っただ方が良いんじゃない？）

（大丈夫だ、もはや余と光希は一心同体思考も読み取れるから案ずるな、光希は最後の時に備えよ）

（・・・ああ、分かった・・・後よろしく）

とりあえず創造神が言う事も事実で、大事な時にガス欠では困るので休むことにする、

今こそ創造神が腹部の傷を塞いで治癒してくれたが戦いでは俺が痛覚を担う事になる。

精神の休養は沢山するに越したことはないからな・・・

そうして俺は意識を体から切り離れた。

光希 s i d e a u t

光希が創造神と会話に耽つてから約3分、ようやく閉じていた目を開け、耳を塞ぐのを辞めた

彼を見て終わつたのかと思つた紫は再び彼に向き直る、事で彼に話を続けるように促す。

それを知つてかそれとも無意識にか彼、創造神は話し始める。

「時間を取らせて悪かったな、妖怪の賢者よ」

「あら、光希では無く今度は創造神様ですか？」

そんな問いに創造神は一回頷く事で答えを返すと紫は、「わかりにくいわぁ」なんて言いいながら扇子で口元を隠して妖しく笑う。だが彼はそれを特に気にすることなく「本題に入るぞ」と短く告げ話はじめる。

「先程の代償の件だが、それには光希にも同意は得ているし余と共に考え、共に選んだ道だ」

「つまり私がなんと云おうと止まることは出来ない？」

「ああ、すまないが・・・その通りだ」

相変わらず固い決意を固めている二人（実際一人だが）に紫は何か諦めたようなため息を溢す。

「そこまで決めているのなら私はお二人を止めませんわ、ただ・・・ここがまた淋しくなりますわ」

そう言つと紫は少し目を伏せる。

「・・・全て押しつけてしまつて悪いな、苦勞をかけてばかりだ・・・」

そんな紫を見て創造神が明らかに気を落とした様な顔をしたのを見て紫は扇子で口元を隠すと、妖しく笑いながら、

「いえ、貴方がそこまで気に病む事は無いですわ、幻想郷を思つての事でしょうから」

と慰める事にした。

「すまないな、理解が早くて助かるぞ」

それに紫は「そこが私のいい所よ」と言つと

「それで？貴方が直接会いに来たということはまだ何かあるのでしょうか？」

緩んだ気を引き締めるように真剣な表情となる。

それを見た創造神は紫の覚悟を悟り、懷から一枚の写真とメモを取り出し。

「これは幻想郷を救う為のものだ、この写真とこのメモは今回の大事な役割を担う物、これをお前のスキ　マとやらに入れて保管しておいてほしい」

と言つて紫に差し出す。

それを紫は内心「こんな物が何の役に立つのか」と疑問に思いながら、

おもむろにそれを受け取りまず写真を見つめる。

それには二人の青年が映っており、一人は紫も良く知る幻想入りして来た青年、柏木光希

次に紫はメモの方に目を通すと、そこに書いてある事に驚愕し、これから行つ時戻しが幻想郷を救う

為の布石でしかない事と、これから行つ事の重大さと過酷さを改め

て理解する。

「光希の記憶から引つ張り出した情報だが、スキマには時間的概念は存在しない様だな？」

創造神は光希の記憶が間違っているとは思っていないが、この条件が確立しなければ今回の計画は全て意味の無い物になってしまった
め紫に尋ねる。

「ええ、確かに私のスキマには時間的概念は当てはまらない、私が望めば過去にも未来にも繋げるわ」

「それを聞いて安心したぞ、ならばそのメモにあることも可能であろう？」

紫は彼から発せられた言葉にこの大異変が起こって以来初めて多大なる希望を抱いた、ここまで希望が見えたのは霊夢達が生きていたときでも無かった。

「分かりましたわ、貴方が託してくれた希望・・・無駄にはしませんわ」

「当たり前だ無駄にされては困る、期待するぞお前にも、過去のお前にもな」

（神に期待されるなんて、荷が重いわ・・・）

こうして彼らは幻想郷を救うために必要な駒を揃えることに成功した。

紫達が会話をしていたのと同時期、かつて人里と言われ人間達で賑わった場所。

今や無法地帯となり人が人に悲劇を与える場所。

しかし今はそんな人すら見当たらない、あるのはかつて人だった物。そんな肉片と死臭が漂う中をもろともせず動く影。

それはまるで次の獲物を見つけたと言わんばかりに上空に飛び上がり、

博麗神社跡地の方角に飛び去った。

残されたのは肉片と真つ赤な液体と、鼻を刺激する死臭だけだった。

ブローグ3 大魔法へとき戻し（後書き）

相変わらず文才レベル1な作者www
こんなじゃキャタピーにも勝てないよお（ポケモン）

プロローグ f i n a l 時戻り天幕は落ち逝く（前書き）

プロローグはこれで最後です。

今回は結構長めです（汗

とりあえずこの回の次にここまでの設定や主人公の

紹介などやろうと思ってます・・・

自分の文才の無さ故に意味分らない人もいるでしょうし（汗

プロローグ final 時戻り天幕は落ち逝く

博麗神社跡地

あれから紫と創造神は創造神の提案にで、これから行う時戻しの儀式のために創造神が地面に弾幕を使って描いた巨大な魔法陣に、いつでも時戻しを発動できるようにあらかじめ魔法陣の起動に必要な

力を溜めておくことにし、二人で描いた魔法陣の中心に立っていた。

「一つ聞きたいのだけど魔法陣に私の妖力なんて注いでも大丈夫なのかしら？」

「なんだそんなことを気にしていたのか？なに、問題無い」

そう言つて創造神は軽く皮肉めいた様に笑い

「魔力も妖力も似たような力だ、起動の燃料には代用できる。だが・・・」

そこで一回言葉を切り

「少々必要となる量が違うがなに、これで最後だ。出し惜しみはしまい・・・」

と続けて言つた。

「最後・・・」

創造神の口から出てきたその言葉を聞いて紫は胸を締め付けられる。創造神も決してそんなつもりで言った訳では無かったが、今の紫にはその言葉が重く押し掛かる

霊夢達が居なくなってから幻想郷はとても寂しくなった。そこから更に彼ら……

柏木光希と創造神が去る事となる、光希に至っては元は外の世界の人間だったが今となっては大事な幻想郷の一員だったし、創造神はこの幻想郷の神だ、話した事はあまり無かったが彼も紛れもない仲間だ。

そんな彼らが居なくなると思うと紫は今すぐこんな事を辞めて奴と正面からぶつかって勝方法を考えたくなくなってしまふ。

だが妖怪の賢者はそこまで馬鹿じゃない、霊夢達が束でかかっても勝てない相手に自分たち二人では勝てないと分かっている彼女は、一度深く息を吐き出しそんな考えを全て吐き出すと

「ええ、最後くらいは派手に決めて奴にひと泡吹かせますわ」

と答えて見せた。

そんな紫を見て創造神は先程から顔色が優れなかった彼女をもうこの場を離れるように言おうかと思っていたが、それは不要な心配だったかと思いなおすと二人とも黙ってそれぞれ魔法陣に力を込めて行く。

そしてあと少しで魔法陣が完全に完成すると言う時、二人は本能的直感で<それ>を感じ取った。

今二人が要る場所に高速で接近してくる巨大な力を。

そんな巨大な力をもつ者はもはや幻想郷には奴しかおらず、それを感じた創造神は

「奴が来る！もうお前はこの場を離れよお前はお前のやるべき事を成せ！」

と紫にこの場を去るように言い聞かせる。

それを聞いた紫は「ええ」と短く答えると、力を注ぐのを辞め創造神に向き直ると

「ここまでですね、私は貴方達が時の概念から取り残されようと・・この幻想郷を救う為に戦った貴方達を決して忘れません。叶うのならいつか時の狭間でまた出会える事を願います」

と言い彼に背中を向ける。すると彼の

「余も忘れん・・幻想郷もお前も他の者達のこと、俺も忘れない幻想郷での生活・・悪くなかったですよ紫さん・・さようなら」

彼らの・・創造神と光希の最後の言葉を聞くと紫は何も言わずにスキマを開き入っていく。

そして・・彼らの前にはまるで最初から誰もいなかったような静寂だけが残った。

side 紫

「余も忘れん・・幻想郷もお前も他の者達のこと、俺も忘れない幻想郷での生活・・悪くなかったですよ紫さん・・さようなら」

彼ら・・創造神と最後の方は光希の声を聞いて私は開いたスキマに入っていく。

ホントなら私も彼らと共に居たかつたし、まだ話もして居たかつた・
・・・・

それでも私に課せられた事は他でもない私にしか成し遂げられないことだ、これが無ければいくら彼らが頑張っても全て無駄になってしまうことになる。

それは決してやってはいけないことだ、だから私はスキマの中を進む・
・・・・

そしてさつさと全て済まして見ていよう彼らが起こしてくれる奇跡を・
・・・・

s i d e a u t 紫

紫がスキマに入って行ってから直ぐ、入れ替わるようにして空から高速で降り立つ影・
・・

それはまさしく本当の影であり、影以外に説明のしようが無かった。

創造神はそれに気付くと降り立ってきたばかりの影に向き直り、突然手を自身の前にかざすとそこから目の前にいる影に負けんばかりの漆黒の炎が出現し、それは徐々に広がって行き一つの西洋の剣を形となる。

そしてもはや語る舌を持たないとばかりに剣を上段に構え相手の出方を待つ。

それを見た影は目にも止まらぬ速さで大地を駆け、創造神に肉薄する。

そして接近する最中に己の手を変形させた剣で創造神の首を落とさんとばかりに降り下ろし、

それに創造神はその手にもつ大ぶりの西洋剣で迎え撃つ。

ギイン・・ガアン！！ギイン

お互いの剣がぶつかり合い金属同士がぶつかる音が響き渡る、お互いに剣を振るう光景は片方が漆黒の西洋剣を華麗に振るっているのに対してもう一方は黒色の剣に変えた己が腕をむやみやたらに振りかかると言う何とも歪な光景で、見せる剣技なら明らかに漆黒の剣を駆る創造神が勝っているだろう。

キインギインカン！！

これは剣技の優劣を競う戦いではなく……

ガン！！キンギイン！！

ただお互いが相手の命を奪う為の戦い……

キインイイ！！ガン！！ギイン！

そこに剣技は関係なく、単純な戦況では徐々に影の方が押していく。

そしてもう何回剣をぶつけあったか分からなくなってきた時その悲劇は起きた。

剣をぶつけた時、突然創造神が作り出し振るっていた漆黒の西洋剣が霧状に拡散し消えてしまったのだ。

「なっ!？」

それを見た創造神は突然起きた事に驚きを隠せず僅かな隙ができ、影はここぞとばかりにさつきにも増してその剣となった己が腕を振るって来た。

その剣劇を防ぐ手段が無いと判断した創造神は咄嗟に大地を蹴り横に飛ぶ。

その判断によって剣劇を回避された影はそのまま横に飛んだ創造神に追い打ちをかけるべく自身も彼を追って駆ける。

(乗って来た!光希今が変わるぞ!)

(おう!起動は任せた!)

しかしそれは創造神いや、今は光希によって仕掛けられた罠で、光希は飛んだ最中に体制を立て直したと同時にしゃがみ込む、するとさつきまで彼の頭があった空間を影の剣が虚しく空を切る。

それを確認する前に彼は影に向かって足払いを掛ける、思ってもいなかった行動に影はそれをまともに受け体制を崩す。

「おおおらあああつ!!貰つとけ!!」

そこに体制を崩した影の腹部に光希の渾身の蹴りがクリーンヒットした。

蹴りをまともに受けた影は情けなく地面を何度かバウンドしながら吹っ飛んで行き、しばらくした所で大地に倒れこむ。

（とらえた！！行くぞ創造神！！）

（制御は余に任せろ！光希は奴を魔法陣から出すな！）

光希は頭で創造神と会話すると彼の意志と関係なく体から魔力が溢れだし、その魔力に反応して影が倒れている場所に先ほど紫と作った魔法陣が浮かび上がり影を魔力の糸で拘束した。

しかし、それでも影は押え切れず、力任せに全て引きちぎり魔法陣から抜けようとする。

ここまでは全て光希と創造神の思惑通りに進み、彼らは最後に時戻しを成就させ幻想郷を救う為に最後の行動に出る。

影が魔力の糸を引きちぎると同時に光希は魔法陣に向かって駆けだし、そのまま自らも魔法陣に入り込み、同時に創造神と契約した際に蛇の尾のように伸びた髪に魔力を流し込む。

しかし接近に気付いた影も光希を迎撃するためその己が剣を振るった。

距離や、場所的に考えて余裕で避けれる攻撃・・・だが、光希はそれをあえて避けずにそのまま影に向かって駆ける。

「ぐあぁっ！！」

結果的に影に肉薄することが出来たがその代償として影が振るった

剣が光希の左肩に深く突き刺さり、傷口からは血が滴り落ちる。

だが

「・・・ふ・・・ふふふ」

彼は苦痛に歪めた顔を上げ

「ははははははははははあhhhhh」

突然狂った様に笑い出した、だが異変はそれだけで無く彼らを囲む魔法陣が突然眩い光を放ち、彼らを包み、それでも足りないと思われに幻想郷全体を照らし出す。

「ははははあ・・・馬鹿が、これが狙いでお前の気持ち悪い剣を貰ってやったんだよっ!!」

そうこれを彼は待っていた、魔法陣に影を拘束し、かつ自分が血を流せる状況

「この魔法陣の起動はなあ、俺の血を垂らす事・・・つまりこれは・・・お前の自爆だ・・・」

魔法陣の輝きは増していく、影は必死に逃れようとするが光希の肩に刺さった剣が抜けずに逃れる事が出来ずにいる。

「お前は楽しかったよなあ？ 霊夢達を、皆を殺して、食らい尽くして・・・」

次第に光が広がっていく中彼は自らが涙を流している事に気づく・・・

・

「でもな・・・あの日から俺は地獄のような毎日だったぜ？・・・」

「

光が広がりもう影の姿は見えなくなった。

「かえせよ・・・霊夢を・・・皆を・・・俺の・・・俺たちの幸せをっ！」

光が広がりもう何も見え無くなった。

「霊夢ごめん・・・守れなくて・・・また・・・約束・・・やぶっ・・・ちゃ・・・

」

意識が遠のいて行く、でも・・・最後に

「もうっ！ホントに馬鹿ね光希は・・・良いわよ泣いて謝らなくって
も」

目の前に・・・霊夢が・博麗霊夢がいた・・・これは夢か・・・

「ホン・・・ト・・・に霊夢なの・・・か？」

でもいい・・・夢だとしても・・・

「なによ・・・私の事忘ちゃったの？・・・」

・・・貴方を愛した私の事を・・・

本当に夢い夢だけ・・・

「忘れないよ・・・だって・・・」

・・・俺が愛した君だから・・・

「「これからは・・・ずっと・・・一緒だ」」

霊夢とまた・・・出会えたのだから・・・よしとしよう・・・
だから俺は眠りに就こう・・・後は任せたぞ・・・悠二・・・

最後まで俺は涙をながしていた、これは過酷な運命に弟を巻き込んで
しまう兄の涙なのか・・・

もう二度と誰にも会えなくなる光希の涙のかは・・・分からなかつた・・・

プロローグ final 時戻り天幕は落ち逝く（後書き）

今回でプロローグはお終いです。長くなってすいません。

次回に前書きで言ったように設定と主人公の紹介をします。

一応飛ばしてもらっても本編には差し支えないので

「こんな駄文説明ないと訳分らない」と言う人だけ見てください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0162y/>

東方現代人記～時を越えて～

2011年11月1日03時18分発行